

交通Bulletin

2005年 秋季号, No.9

発行日：平成18年1月31日
 発行：日本大学理工学部
 社会交通工学科教室
 ☎ 047-469-5239 (教室事務)
 発行責任者：星埜正明 (教室主任)
 編集担当：伊東 孝・岸上明子・野水雅之
 制作：株式会社 テイクアイ

DEPARTMENT OF TRANSPORTATION ENGINEERING AND SOCIO-TECHNOLOGY · COLLEGE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY · NIHON UNIVERSITY

■ CONTENTS ■

巻頭言：柳沼善明	1	学科を取り巻く近況	22
教室の動き	3	OPEN CAMPUS SNAPS	24
教員のアクティビティ	10	編集後記	24
学生のアクティビティ	12	[TOPICS]	
卒業生からのメッセージ	17	「わたちの会」が新体制へ	2

巻頭言

コンクリートボート

教授 柳沼善明

日本で初めて開催するコンクリートカヌー・ボート大会への案内が土木学会関東支部から届いた。1995年7月のことである。この大会は、本来「静」なものである土木構造物に対し、主要な土木材料であるコンクリートを使用して「動」なカヌーを造ることで、次代の建設界を担う学生諸君に、十分な「遊び心」をもちつつも「もの創り」の楽しさを実感してもらうことを意図として始められた。コンクリートカヌーは長さ4m以内で2人乗りであるとの制限がついているものの、その他は自由である。競技は300mの直線コースで順位を競うものである。

ゼミ生に話をしたところ、多くのゼミ生が興味をもち、大会に参加することにした。コンクリートで船など造ったことはない。カヌーやボートなどまったく船について知識がない我々は、第一の目標を「とにかく浮くものを造る」ことにして、計画を進めていった。ボートの形は、水に浮かばかりでなく、安定した船がよいということで、カヌーの形ではなく、オーソドックスなボートの形とした。次に、コンクリート製の船について文献を調べた。するとコンクリート製漁船がすでに存在していることを知った。早速セメント関連会社の先輩を訪ね、コンクリート製の船についてお教えいただいた。

コンクリートボートの設計にとりかかり、設計ができたのは大会の1ヵ月前であった。ボート作製の手順は、①鉄筋を曲げて骨組みを造る、②骨組みに金網を2層に張る、③2層目の上に鉄筋を配筋する、④その上に金網を2層張る、⑤モルタルを塗りこむ、⑥ボートの内装を仕上げる、

⑦ボートの外装を仕上げる、という7工程である。いざ造り出すと、さまざまな問題に突き当たった。設計時ではうまく造れるだろうと考えていたことも、実際にやってみると思うようにいかず、学生たちはどうしてよいかわからなくなると、すぐに解答を求めてきた。しかし、私は「正解などない。ベストを尽くすのみである。ボート大会のレースでその答えがわかるかもしれない」と、さらに「創意工夫すべし。アイデアの泉は涸れない」と叱咤激励するのみであった。机上の想像のみでなく、考えた形を実際に造り、さらに改良を加え、造り、また難問が持ち上がる。試行錯誤の連続であった。そのつど学生たちは話し合い、アイデアを出し合って、難局を乗り越えていった。コンクリートにひびが入って水漏れして船が沈まないか、船が不安定で傾かないか、重すぎて沈まないかなど、不安なことがらが寝ても覚めても常に脳裏をかすめていた。これらの不安をもちつつ学生たちの情熱は、ただコンクリート製ボートを完成させることであった。ボートの外側にペンキを塗り、ボートが完成したのは、大会の3日前のことであった。

日本初のコンクリートカヌー・ボート大会は1995年9月2日に参加校17校で、浦和市の荒川調節池(彩湖)で開催された。我々の造ったボートはこの日が進水式で、浮くか沈むか不安であった。重量300kgのコンクリート製ボートを持ち上げ、水辺に運んだ。ボートは重かった。こんなに重いボートがはたして浮くのであろうか。ボート作製中のさまざまな難問や不安が頭の中を駆け巡っていた。徐々に水の中にボートをおろしていった。すると、今

まで重かったボートが、徐々に軽くなっていった。全員の
手がボートから離れた瞬間に、ボートは浮いていた。思わず
歓声が上がっていた。大会では、漕げども漕げども前に
進まないボート、水が浸み込んで沈没するカヌー、真
直ぐに進まないボートなどが続出した。我々のボートは、
運よく1位で予選を通過した。が、準決勝で惜しくも負け
てしまった。大会が終了し、皆でかわるがわるボートの乗
り心地を確かめた。どの顔にも喜びの笑顔があった。大会
の結果はどうであれ、ボートが浮いた喜びと、もの造りの
楽しさを学生たちと分かち合えたことは貴重な体験だった。

ボート造りは困難の連続であった。難問を話し合いなが
ら解決方法を考え、ひとつの解決策にたどり着き、実行す
る。すると、また次の難問に突き当たる。また話し合い、
実行する。これの繰り返しである。時間は限られている。
その中で満足するものを造っていかねばならない。おの
ずとそこには未解決のまま次の課題として残していくも
のが出てくる。なぜなら、この課題を解決するための時間
的余裕がないからである。難問の解決策を考える時、あま
り考えずに、「えい」とばかりに衝動的に行動してしまう
ことがある。その多くが失敗するのだが、偶然にもこれが
うまくいくことがある。ラッキーである。ノーベル賞を受
賞した小柴昌俊先生が「考えて、考えて、考えてぬくと、
山勘の当たる確率が高くなる」と言われている。まさに、
四六時中ボート造りを考えている結果、無意識にその時点

での最良の解決策を実行していたのではないだろうか。常
日頃、何も考えずに勘のみを働かせて行動したものは、す
べて失敗している。何事も、普段の心がけが大切であると
つくづく感じさせられた。

その後、ボート大会には連続して出場した。新しいボ
ートを作るごとに、技術が伝承されていく。さらに、失敗が
蓄積されていく。もの造りには、成功したことよりも失敗
したことの蓄積のほうが重要である。数多く失敗していれ
ば、それと同じようなことをしたら、その結果は必ず失敗
するということがおのずとわかるからである。多くの失敗
を恐れず、大いに情熱を燃やし、行動しよう。それが、将
来の糧になることを信じて。



写真① 浮かんだ、乗れた、さあ進め

TOPICS

「わだちの会」が新体制へ

交通工学科、交通土木工学科および社会交通工学科卒業
生の同窓会である「わだちの会」の平成17年度定例代議員
会が、平成17年7月13日(水)18時より、理工学部駿河
台校舎1号館第122会議室で開催され、会長が1期生の木
村克正さんから2期生の高田邦道先生に交代することが承
認され、その後高田会長からの提案で、役員・事務局長も
下記の新たな体制で臨むことになりました。合わせて、こ
れまで長い間「わだちの会」の運営に尽力されてきた木村
克正さん、小西和夫さん、巻内勝彦先生は新たに設けられ
た特別顧問に就任していただき、今後も「わだちの会」の
運営に対して助言を頂くことになりました。代議員会終了
後は、1号館2階のカフェテリアで懇親会が行われ、教室
から星塾正明主任、天野光一教授、伊澤岬教授にも参加し
ていただき、まず高田新会長の挨拶、顧問になられた方へ
の感謝状、星塾教室主任の挨拶があり、その後みなさんの
近況報告が行われ、これからの会の運営についても意見が
交換されました。会の活動に関しては現在見直し中で、今
後活発な活動を行っていく予定です。

会長 高田邦道(2期) 日本大学理工学部
副会長 綾木修二(6期) 千葉県

副会長 川口芳夫(8期) アーバントラフィックエンジニアリング
理事 津越由康(5期) 五島記念文化財団
理事 森下庄三(6期) URリンケージ
理事 勝田実(8期) 野田市市議会議員
理事 神谷昇(9期) 小田急電鉄
理事 下川澄雄(18期) 助国土技術研究センター
事務局長 福田敦(18期) 日本大学理工学部

なお、「わだちの会」の役員交代と同時に理工学部校友
会の交通部会の部会長・常任幹事も交代となり、「わだちの
会」の副会長・理事から以下の方が就任されました。また、
今回は理工学部校友会の副会長を土木系から選出すること
になり、津越由康さんが就任されることになりました。

理工学部校友会 副会長：津越由康
理工学部校友会 交通部 部会長：川口芳夫
常任幹事：森下庄三、勝田実、
神谷昇、下川澄雄

(文責：福田 敦、江守 央)

教室の動き

本年度の主な教室の教育関連行事の概要を報告します。

2005年度 新入生オリエンテーション

岩井茂雄・中山晴幸(1年生担任)

社会交通工学科で新入生オリエンテーションとして毎
年恒例となっている東京浅草吾妻橋～横浜港・山下公園
までの船によるクルージングが、本年度も2005年4月16
日(土)に開催された。このオリエンテーションは、関東
学院大学工学部社会環境工学科と共同で実施している行事
で、本学科が横浜港まで船を利用した後、関東学院大学の
新入生が横浜港から東京・浅草までクルージングして、ル
ートに点在する震災復興時に建設された橋梁、歴史的建造
物、高速道路、空港、港湾施設などを船上から普段と異な
る視点で見学する企画である。

参加者は、新入生および編入生など142名、大学院生
39名、研究生3名、教職員16名、さらにゲストとして農
林水産省、国土交通省に勤務するOB2名の総勢202名。
午前9時に浅草吾妻橋の船乗り場に集合し、9時30分に
横浜港へ向けて出航した。天候に恵まれておだやかなクル
ージングが始まったが、残念ながら中国からの留学生1名
が集合場所がわからずに出航時間に遅れてしまったため、
船に乗ることはできなかった。本人は電車で山下公園まで
移動して現地で合流し、他の中国からの留学生や新入生ら
とともに横浜中華街を楽しんだ。

新入生にはこのクルージングで興味をもったことにつ
いてレポートにまとめる課題が出されていたため、歴史的橋
梁やレインボーブリッジなど新しい橋梁を普段見ることが
できない位置から見上げ、その構造や交通施設を写真撮影
していた。伊東孝先生、天野光一先生など多くの参加した
先生方からの解説もあって、短時間に東京から横浜までの
交通施設などや沿岸域開発などを見学でき、また新しい仲
間と知り合える良い機会となった。12時頃、横浜ベイブ
リッジを横目に見ながら、船は山下公園の船着き場に到
着、待ちかまえていた関東学院大学社会環境工学科新入生
とエールの交換を行い、今後の健闘を誓い合った。



写真② 普段は見ることのない隅田川の橋梁構造を下から見上げる



写真③ 震災復興と橋梁について、伊東先生からさまざまなお話を伺う



写真④ 隅田川を離れ、レインボーブリッジを通過して東京湾へ



写真⑤ 羽田空港を離陸する旅客機を海上から…

交通現象解析Ⅰ「下田合宿」

藤井敬宏(交通現象解析Ⅰ担当)

本学科では、学科創設時からの伝統行事として合宿形式
による屋外実習を約40年間続けております。この下田合
宿は、平成13年度より3年生の専門必修科目である「交
通現象解析Ⅰ」の交通調査の演習として実施し、本年度で
5年目を迎えました。

交通現象解析Ⅰは、各種交通実態調査を集中的・総合
的に行うことで交通技術者を目指す学生が交通現象を一貫
した捉え方で把握し、調査地域の交通の特徴と問題点そし
て改善点を探り、地域社会に貢献し得る調査技術を習得す
ることを目的としています。

本年度は、9月15日(木)～18日(日)の3泊4日、
学科教職員14名、調査補助として参加していただいた大
学院生13名、学部4年生2名、研修生2名のスタッフ31

名と、学部3年生130名の総勢161名にて行われました。合宿は、伊豆急「踊り子号」にて下田に到着後、下田市建設課の平川様より「伊豆縦貫道路の整備について」のご講演を頂きました。その後、自分たちの足で調査地点を確認し、町並みや生活の様子などの地域の特徴を肌で感じ、下田市の歴史資料館を見学するなど、この地の文化・歴史を知るところから実習がスタートしました。

調査は、①国道の主要交差点の交通容量調査、②主な路外駐車場や旧市街地内の路上駐車の実態調査、③下田市内の交通の円滑性を評価するためにタクシーを借り上げて行う旅行時間調査、そして、④旧市街地を囲んで設定したコードラインにおける車両番号照合法調査、の4つの調査を実施いたしました。下田市では、架け替え工事が行われていた「みなと橋」が2005年4月より開通し、昨年の一方通行による交通規制が解除され、併設する国道を含めた交通変化や既成市街地内に及ぼす影響などが生じており、交通運用上、貴重なデータを収集することができました。また、2005年、国土交通省より伊豆縦貫道路の整備計画が提示され、下田市では既成市街地の直近に建設されるIC（インターチェンジ）により、まちが質的に大きく変貌してしまう影響を改善するために、都市計画マスタープランの再検討を急ぐこととなり、今年度より「市民まちづくり会議」を設置して検討を進めております。この市民まちづくり会議の交通検討会が平成17年9月9日（金）に開催され、下田市建設課の要請を受け、過去の本学科が行った交通調査の実績を中心に、「下田市既成市街地の交通改善計画」を講演いたしました。その後、同席した大学院生1名、学部4年生2名が、検討会参加者とのグループディスカッションに加わり、現状の課題と今後の対策などについて意見交換を行いました。参加者の方々からは、「社会交通工学科の学科を上げた取り組みとして、市の交通実態を経年的に調べていただき、10年・20年先の下田のまちを一緒に考えていただけたら本当ありがたい」というようなたくさんの賛辞を頂きました。学生たちの取り組みが下田市の交通改善に直接寄与し、社会に還元できるような提案に繋がる道が展開されてきていることを強く実感したとともに、今後の大学としての取り組みを下田市民が



写真⑥ 「市民まちづくり会議」における交通検討会

大いに期待していることを肌で感じてまいりました。

本年度の交通実態調査は順調に解析が進んでおり、今年3月には報告書を完成させることを目標に、下田市の都市計画マスタープランに直接活用していただけるよう準備を進めております。

オープンキャンパス2005

岸上明子（オープンキャンパス学科連絡担当）

2004年度の“CSTとは、何かを知る3日間。”に続き、2005年度、理工学部は“FLY HIGH きっと、見つかる君だけの未来”をキャッチフレーズに広報活動に励んでおり、7月23日（土）に「駿河台入試フォーラム」（駿河台キャンパス）、7月31日（日）に「オープンキャンパス」（船橋キャンパス）、そして11月6日（日）に「キャンパスウォッチング」（船橋キャンパス）が開催されました。

「入試フォーラム」では、藤井敬宏助教授による学科紹介の後、「公共施設のデザイン」、「交通が未来の都市をつくる。」のテーマのもと天野光一教授、轟朝幸助教授によるミニ講義が行われました。入試フォーラムへの来訪者は延べ76名であり、うち26名が学科相談を受けました。

「オープンキャンパス」では、峯岸邦夫助手による学科紹介、高田邦道教授による「交通技術者としての道」、伊澤岬教授・江守央助手による「住民参加のバリアフリー」についてのミニ講義が行われました。学科別ミニ講義に加え、学科紹介プログラムとして14号館1442教室では、「透水性舗装実験」「バリアフリー体験」「技術英語・ネット体験」「地球環境と景観デザイン（模型展示）」「日本と世界の土木遺産（パネル展示）」などが催され、屋外では「走行実験」「コンクリートカヌー」「セグウェイ」を体験してもらいました。各プログラムを体験するスタンプラリーを導入し、ミニ講義には延べ96人、学科紹介プログラムには延べ426人（学科相談15人）が参加してくれました。天候にも非常に恵まれ、屋外のプログラムを担当して下さった先生・学生方には炎天下での苛酷な作業となりましたが、コンクリートカヌー、セグウェイ、走行実験の企画にもそれぞれ26人、114人、124人と予想を上回る多くの高校生が参加してくれました。

「キャンパスウォッチング」は昨年同様、習志野祭最終日に開催され、キャンパス見学をはじめ岩井茂雄教授によるミニ講義と轟助教授による学科相談が行われました。父母を含め23名がミニ講義を聴講され、学科相談には2組の高校生・父母が来られました。

昨年度よりオープンキャンパス学科連絡担当としてオープンキャンパス関連のイベントに参加させていただいていますが、来訪者に父母が多いことに気づきます。そして、大学で何を学べるのか、どういった就職先があるのかなど、高校生より父母側が大学進学により具体的な将来像

を求め、描こうとしている場合が多く、入試を取り巻く環境が私自身が受験生だった一昔前とは大きく違うことに驚かされます。また、先生方の高校訪問を通して当学科に興味をもち、展示パネルの内容を熱心にノートに書き記している高校生や、入試フォーラム・オープンキャンパスの両イベントに参加してくれる高校生に出会うと嬉しくなりますが、社会交通工学科の存在や概要をイベントに来て初めて知る高校生もまだ少なく、魅力的な学科であるための努力とともにその存在を高校生をはじめ、受験関係者、父母にもアピールしていくことが重要だと痛感しています。

延べ数にはなりますが、2005年度は800名を超える高校生・父母がイベントを通して社会交通工学科に足を運んでくれました。“FLY HIGH きっと、見つかる君だけの未来”にあるように、オープンキャンパスのイベントをきっかけに、一人でも多くの高校生が、夢をかなえるための第一歩として社会交通工学科を選択してくれることを心から願います。

スポーツ大会

巻内勝彦・福田 敦（3年生担任）

学科恒例のスポーツ大会が3年生の幹事を中心に各学年の幹事の協力のもと、実施されました。前日の予想では降水確率が80%ということで実施が危ぶまれましたが、結果的にはほとんど雨が降らず、予想していた競技を無事終了することができました。

開会式では、まず3年生の担任を代表して巻内勝彦先生から「ぜひ、親睦を深めるように」との挨拶があり、さらに3年生の中村賢治君の選手宣誓によって開会が宣言され（写真⑦参照）、その後各会場に分かれて熱戦が繰り広げられました。各競技の優勝チーム、優勝者名は以下の通りです。

【ソフトボール】

「1年ブラックパンティーズ」：5009 有田泰久、5017 市河卓也、5026 上原裕谷、5075 島根慎吾、5080 諏訪英俊、5090 多和田翔、5091 塚越由倫、5093 寺井好、5098 中島慎一、5100 中津川真吾、5109 畠中健佑、計11名

【バスケットボール】

「1年県選抜」：5006 浅野将央、5030 海老原大輔、5038 大高秀之、5046 小田芳久、5067 坂本一馬、5081 関口将文、計6名

【バレーボール】

「1年ブラザーズ」：5017 市河卓也、5047 面川英確、5075 島根慎吾、5091 塚越由倫、5092 土屋順輝、5093 寺井好、5098 中島慎一、計7名

【フットサル】

「3年お嬢&姫」：3001 青木優弥、3002 秋草弘喜、3042 金井佑基、3051 小池幸玄、3151 若宮一恵、3152 和気悠治、計6名



写真⑦ 巻内先生を前に選手宣誓をする中村君

【テニス】

3112 野口智彦

【バトミントン】

5055 木村佐和子

【腕相撲男子】

「60 kg以下の部」2122 細谷渉太、「60 kg～70 kgの部」2110 原口晃、「70 kg以上の部」3025 江田仁、「女子の部」5055 木村佐和子、「総合チャンピオン」江守央

競技終了後、幹事代表の3年關口崇君らの司会によりファラデーホール2階で懇親会が開催されました。3年担任の挨拶、藤井敬宏先生の乾杯の発声の後、各優勝チームの表彰、腕相撲大会、さらに幹事の企画による景品の抽選会が行われ、大いに盛り上がりました。1年生から大学院生、教職員さらには多数のOBが一堂に会して、親睦を深めることができました。なお、参加者は巻内、岩井、下辺、藤井、轟、中山、峯岸、江守、野水、吉永の各教員（敬称略）を含め200名でした。

最後に、グラウンドで飲んだペットボトルが片付けられていないという苦情が学生課からありました。親睦と同時に、マナーを守ることも大切だということを忘れないでください。

平成17年度 社会交通工学科就職懇談会の開催

巻内勝彦・福田 敦（3年生担任）

平成17年度社会交通工学科就職懇談会を、平成17年11月12日（土）15:00から17:20まで、14号館1424号教室で開催しました。3年生の担任を代表して巻内勝彦先生より挨拶、就職への心構えに関する話があった後、国際航業（株）取締役技師長の水間雅昭さんより、建設業界全般における動向と就職への注意、（株）フジタ土木本部技術営業部長の畑野俊久さんより、学生に業界が求めるものと学生自身の心構えについてお話を頂き、その各業界で活躍するOB・OGより各5分程度、業界の内容、就職に向けての準備の方法などについてお話を頂きました。懇談会終了後



写真⑧ OBからお話を伺う

は、パスカルホール1階で懇親会を開催しました。懇親会では、星埜正明主任の挨拶、水間さんの乾杯の後、それぞれのテーブルに分かれて各OB・OGから具体的なお話を伺うことができました(写真⑧)。最後に、大学院2年生担任の柳沼善明先生より挨拶を頂き、就職戦線に勝ち抜くことを皆で決意して会を終了しました。なお、懇談会でご講演いただいたOB・OGは以下のみなさんでした。

- 水間雅昭 国際航業(株) 取締役技師長
- 畑野俊久 (株)フジタ 土木本部技術営業部長
- 高橋和希 テクノブリッジ(株)
- 小田崇徳 (株)社会システム研究所
- 大沼郁俊 梅澤忠夫都市計画事務所
- 越川裕康 (株)日本設計 本社設計室
- 岡部 順 (株)数理計画
- 山浦克久 (株)近代設計 東京支社技術三部
- 池上雄一 東洋エクステリア(株) 商品本部住宅開発部
- 堀野真雄 (株)パスコ
- 濱地真也 リコーロジスティックス(株)
- 石山静樹 中日本高速道路(株) 横浜支社横浜技術事務所
- 萩尾泰弘 東日本旅客鉄道(株) 東京工事事務所
- 金山拓郎 新宿区環境土木部道とみどりの課みどりの係 主事
- 八幡善治 警視庁交通部都市交通規制課

昇格

—岩井茂雄教授・福田 敦教授・小早川悟専任講師—

岸上明子・野水雅之

平成17年4月より、岩井茂雄先生、福田敦先生は教授に、小早川悟先生は専任講師へと社会交通工学科の3名の先生方がそれぞれ昇格されました。以下に3先生のこれまでのご略歴とご功績の一端をご紹介します。

岩井茂雄 教授、博士(工学)

1977年に本学理工学部土木工学科を卒業し、1979年に大学院理工学研究科博士前期課程土木工学専攻を修了されました。建設省土木研究所に奉職後、本学交通工学科に移籍、副手、助手を務め、1983年国際協力事業団(JICA)の専門家としてフィリピン工科大学総合技術訓練センターに派遣、1985年本学交通土木工学科助手に復帰後、専任講師、助教授を経て、2005年4月より教授に昇格なさいました。

また、1989年に(社)日本道路協会第18回日本道路会議優秀論文賞、2001年(財)東京交通安全協会交通栄誉賞緑十字銅賞を受賞されています。

岩井先生は、交通環境工学、環境地盤工学を専門とされており、現在は、環境・技術者倫理、環境工学総論、環境循環工学、建設材料、水理学、舗装工学、舗装材料実験の教鞭を執っています。

福田 敦 教授、工学博士

1982年に本学理工学部交通工学科卒業、1984年に大学院理工学研究科博士前期課程交通工学専攻を修了、1988年には大学院理工学研究科博士後期課程交通工学専攻を修了されました。同年より本学交通土木工学科助手を勤務、1989年より国際協力事業団(JICA)専門家としてアジア工科大学院地盤・交通工学科に派遣、1992年本学交通土木工学科専任講師に復任後、助教授を経て、2005年4月より教授に昇格なさいました。

1989年に(財)国際交通安全学会論文部門で論文賞、1997年(社)土木学会第52回年次学術講演会優秀講演者表彰、2003年にBest Paper Award in Decision Technologies in Management Truck at 36th Annual Hawaii International Conference in System Sciencesを受賞されています。

福田先生は、交通システム分析、交通工学を専門とされており、現在は、システム工学、技術英語、交通システム計画、交通需要予測、社会基盤計画学の教鞭を執っています。

小早川 悟 専任講師、博士(工学)

1991年に本学理工学部交通土木工学科卒業、1994年に米国ジョージワシントン大学大学院博士前期課程トランスポートマネジメント専攻を修了されました。その後、本学交通土木工学科助手を勤務し、2005年4月より専任講師に昇格、同年9月より英国リーズ大学に outward されています。

また、2000年(社)土木学会第55回年次学術講演会優秀講演者表彰を受けています。

小早川先生は、交通工学、交通経営工学を専門とされており、交通マネジメント、交通現象解析、交通システム計画、技術英語の教鞭を執っています。

新任教員・非常勤講師の紹介

■平成17年度 新任教員

吉川勝秀 教授、工学博士、技術士(水環境システム研究室)

東京工業大学大学院修士課程—建設省土木研究所研究員—同省河川局治水課長補佐・河川計画課建設専門官・流域治水調整官—下館工事事務所長—大臣官房政策課長補佐・環境安全技術調整官—国土技術研究センター部長—大臣官房政策企画官—国土交通省政策評価企画官—同省国土技術政策総合研究所環境研究部長—慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授—リバーフロント整備センター部長—日本大学教授

2005年4月より、伝統ある本大学の社会交通工学科に籍をおくことになりました。

私は大学を卒業して以来、約27年間を国土交通省(旧建設省を含む)の行政に身を置き、約3年間は財団法人で仕事を経験しました。国土交通省では、建設省土木研究所で約6年、同省河川局で約5年、同省大臣官房で約7年、そして地方建設局や工事事務所で約5年、国土交通省政策評価企画官・国土技術政策総合研究所部長として約3年間仕事をしました。

そして、国土交通省を退職し、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授、および財団法人の部長として約1年半仕事をし、中央大学大学院理工学研究科・同理工学部、名古屋大学大学院理工学研究科、千葉工業大学大学院、そして本学社会交通工学科の講師(非常勤)として、その他の大学でも教育・研究に従事する機会を得ました。

行政での実務経験と財団法人での経験、さらには他大学での経験も生かしつつ、実社会を強く意識して、教育と研究に取り組んでいきたいと考えております。また、社会とのつながり、社会貢献という面で、内閣府総合科学技術会議などの政策関係、日本学術会議や各種学会などでの社会的な仕事、NPO活動などにも取り組んでいきたいと考えています。

学部では、水理学、河川流域工学、環境・技術者倫理を講義し、大学院では現在は交通環境工学特論を担当しておりますが、来年度からは流域圏都市特論、住民参加とまちづくりを担当する予定です。

卒業研究、ゼミ、さらには科学技術振興機構などの外部資金での研究で、川や水、川や海からの都市再生、自然共生型流域圏・都市再生、さらには国際的なフィールドでの持続可能な水政策シナリオ研究などを進めています。研究に関連して、内閣府総合科学技術会議(首相が議長)で進める第3期科学技術基本計画の策定と推進に関しては、重点分野である環境分野の中の重点課題、水・物質循環と流域圏・都市再生に係わる研究計画の策定・推進のコーディネータなども務めています。

どうぞよろしくお願いたします。

(著書)

単著：『河川流域環境学』『人・川・大地と環境』いずれも技報堂出版

共著：『地域連携がまち・くいを変える』小学館、『東南・東アジアの水』日本建築学会、『自然と共生する流域圏・都市の再生』山海堂

編著：『流域圏プランニングの時代』『川からの都市再生』いずれも技報堂出版、『川で実践する福祉・医療・教育』学芸出版、『水辺の元気づくり』『市民工学としてのユニバーサルデザイン』いずれも理工図書、『川のユニバーサルデザイン』山海堂

監訳：『建設工事の安全管理』山海堂

編集者代表：『改定 解説・河川管理施設等構造令』山海堂

研究会代表：『改定 解説・河川工作物設置許可基準』山海堂
その他、論文なども数多くある。

吉永聖仁 副手

1983(昭和58)年生・熊本県出身

熊本マリスト学園—日本大学理工学部社会交通工学科—日本大学副手

今年度より副手となり、そろそろみなさんに名前と顔を覚えていただいた頃かと思います。学校では主に、地盤材料実験、舗装材料実験、測量、交通現象解析Iなどの授業補助や各種学科業務を行っています。また、スポーツ大会、ソフトボール大会や研究室の行事に参加し、みなさん(学生)と一緒に楽しみ、頑張っていきたいと思っていますのでよろしくお願いたします。

環境工学研究室に籍をおいていますが、学校内で見掛けたら気軽に声をかけてください。

■平成17年度 非常勤講師

(氏名・担当科目、本務先・学位・資格)

・大学院

- 赤羽 弘和 交通計画特論IV
千葉工業大学工学部建築都市環境学科 教授、工学博士
- 新井 洋一 交通施設工学特論V
(株)エコブックス 新井研究室 取締役会長
- 大岡 哲 交通施設工学特論Ⅶ、特別講義Ⅱ(学部)、卒業研究
大岡事務所 理事長
- 小山 幸則 交通施設工学特論Ⅵ
(財)地域地盤環境研究所
- 宮森 建樹 土質力学特論、地盤力学Ⅰ・Ⅱ(学部)、構造力学Ⅱ(学部)、卒業研究
工学博士
- 室町 泰徳 交通計画特論Ⅲ
東京工業大学大学院総合理工学研究科 助教授、工学博士
- 森田 綽之 交通工学特論Ⅰ・Ⅱ、道路工学Ⅰ(学部)、卒業研究
日本交通技術(株)、工学博士

森地 茂	土木計画学特論 政策研究大学院大学 教授、工学博士
・学部	
阿部 絢子	土木関連法規・行政 株松屋
荒井 博	建設マネジメント 宏和エンジニアリング株
井上 寛美	軌道工学 株テス、博士(工学)
伊村 則子	都市防災 武蔵野大学人間関係学部、博士(学術)
岩佐 行利	都市衛生 東京都下水道局計画調整部
内田 滋	交通現象解析Ⅰ 日本交通技術株、技術士
岡村 和子	交通生理・心理学 科学警察研究所交通部交通安全研究室
荻津 修	構造デザイン 八千代エンジニアリング株、技術士
加藤 三郎	環境循環工学 株環境文明研究所 代表取締役、工学修士
川口 利之	製図、景観設計 株川口建築設計事務所 代表取締役、一級建築士
木戸 伴雄	交通現象解析Ⅰ・Ⅱ、ゼミナール、卒業研究 工学博士
木村 克正	構造設計Ⅰ 技術士
是枝 孝	港工学 株日建設計 顧問
佐田 達典	測量学、空間情報工学、測量実習 三井住友建設株技術研究所土木生産研究室長、 博士(工学)
對木 揚	都市計画 株つき都市企画 代表取締役、修士(工学)
西田 泰	交通生理・心理学 科学警察研究所交通部交通安全研究室
西村 浩	景観設計 株ワークヴィジョンズ 取締役
根本 敏則	交通経済学 一橋大学商学研究科
二村真理子	交通経済学 愛知大学経営学部
松村 英樹	構造設計Ⅱ 新構造技術株
丸山 康司	環境経済学 株産業技術総合研究所
三島 研二	測量学、測量実習 株パスコ GIS 総合研究所主席研究員、工学博士
矢野 伸裕	交通生理・心理学 科学警察研究所交通部交通安全研究室

客員研究員の紹介



本永良樹（水環境システム研究室）

本年度4月より客員研究員として水環境システム研究室（吉川勝秀先生）に所属しております。沖縄県で生まれ育ち、東京工業大学—中央大学大学院—(財)リバーフロント整備センター—現職と渡り歩いてきました。学生時代は土木工学の中の水理学、河川工学を専攻しており、ほぼずっと力学畑を歩いてきました。現在、「自然共生を目指した流域圏・都市の再生」を主な研究テーマとしておりますが、正直申し上げて、いまだ戸惑いも多いです。ただ人口が減少に向かい、開発に重きをおいた成長はもはや望めない我が国においては、今後その重要性がますます際立ってくる分野だと思えます。研究分野としては比較的新しくできた分野です。世の中に物申したい元気な日大生がいれば、一緒に取り組んでくれることをぜひ期待したいです。

計画系とはこれまで無縁でしたので、他の研修生や研究員の方々、あるいは学部生・大学院生とは若干「嗜好」が異なるかもしれませんが、違うバックグラウンドをもつ者同士でインスパイアしていければ、と考えております。

水理学でわからないこと、あるいはそれ以外でも相談事があれば、719号室へたずねてきてください。



Tuenjai Fukuda

Dr. Tuenjai Fukuda received her Master of Science in Environmental and Natural Resource Economics from Chulalongkorn University, Thailand and Doctor of Engineering in Transportation Engineering from Chuo University in 2000 and 2004 respectively. After graduation, Dr. Fukuda began to work as a research fellow at Transportation system Laboratory, Department of Transportation Engineering and Socio-Technology, Funabashi Campus. She is currently working on the AJLT-8 project directed by Ministry of Land, Infrastructure and Transport (MLIT) in collaboration with the research project H-748 under sponsorship of International Association of Traffic and Safety Science (IATSS). Her research interests are transportation policy and practice on new transportation and technological development such as car sharing and station car, an application of Intelligence Transportation System (ITS); Attitudinal and Behavioral Study on potential innovative mobility users in developing countries; Traffic psychology (Hiyari-Hatto Concept) on road users and mobility management application; Application on Geographic Information System for management of potential hazardous and existing black spots in land transport;

Clean Development Mechanism on utilizing bio-diesel as alternative fuel to resolve global warming and Conflict Management on transportation and environment.

She consecutively received the Certificates of Excellence in recognition for the distinguished presentation from the Sixth and Seventh International Summer Symposiums of Japan Society for Civil Engineers in 2004 and 2005.



Karin Limapornwanitch

Dr. Karin Limapornwanitch received his Master of Engineering from Asia Institute of Technology and Doctor of Engineering in Transportation Engineering from Saga University in 2001 and 2004 respectively. Dr. Karin joined Transportation System Laboratory, Department of Transportation Engineering and Socio-Technology and worked as a research fellow until the end of October. During his stayed at Transportation System Laboratory, he took care of several research projects, concerning micro-simulation model, motorcycle behavior analysis, etc. Also, he organized several workshops in English for graduate students in order to encourage them. Currently, he finished his contract and back to Thailand. Now, he becomes a monk shortly and plant to work at a consultant firm.

新設科目紹介「特別講義Ⅰ・Ⅱ」「学芸員課程」

伊澤 岬・伊東 孝

「特別講義」は、時宜に応じた内容をわかりやすく学習・理解することに特徴がある。

今年度は、2つの特別講義が開設された。

「特別講義Ⅰ」

前半「交通空間のデザイン」をテーマに駅、空港ターミナル、客船ターミナルの計画とデザインと、水の道、運河について授業する。

後半は「福祉とまちづくり」をテーマに、建設関係に関わる「ハートビル法」「交通バリアフリー法」などの法整備の動向、交通バリアフリー法については、基本構想の策定やバリアチェックを演習として行うなどの社会と直結した授業を展開する。

「特別講義Ⅱ」

3人の教授陣で講義を担当し、現代的な3つの課題（公共経済、建造物の劣化と補修、都市の保存と保全）について学習し、理解を深める。大岡哲先生は、ジョセフ・ステイグリッツ著『入門経済学』（東洋経済新報社）および自著の『日本経済を考えるヒント』（丸善ライブラリー）を

教科書として講義。柳沼善明先生は、「鉄筋コンクリート建造物の劣化・損傷の現状・原因・対策」「非破壊検査の概説。補修・補強工法の概説」「劣化予測の概説」「維持管理の概説」の講義。伊東は、「都市の保全と保存」「建造物の保全と保存」を講義。

「学芸員課程」

全国的にもめずらしい理工学部での開設

今年度から理工学部に学芸員課程が設置され、駿河台・船橋の両キャンパスで後期から講義が開始されました。学芸員課程はふつう、文科系の学部に設置されていますが、理工学部に学芸員課程があるのは、全国的にみても大変めずらしく、貴重なものです。めざとい大学からは、早速資料請求がきています。これは、別項で紹介したCST MUSEUMとワンセットになり、実習の一部をCST MUSEUMで行います。上級生には十分説明がなされていなかったせいか、今年度の申込者数は1年生を中心とした60余名と少ないですが、在学中に資格がとれるので、将来へのステップアップの手段として生かさず手はありません。

学芸員と聞くとみなさんは、博物館の学芸員を想像するかもしれませんが、学芸員の活躍の場は公的な博物館や美術館だけでなく、企業博物館や記念館、役所、デパートなどさまざまな職域があります。特に理工系の学芸員は絶対数が少ないため、社会的なニーズが高まっています。1992年からは文化財の中に産業・土木・交通遺産がふくめられ、96年には登録文化財制度が導入されて、工学系の活躍する分野はますます広がっています。

いままでの技術者は古い建造物やものをみると、取り壊したり、捨てることしか考えませんでした。しかし学芸員の資格を得たみなさんは、きっと「いや、ちょっと待てよ」という気持ちを抱くのではないのでしょうか。個人的には、そういう技術者が1人でも多く育ってくれることを願っています。

現実的な話をすると、うちの理工学部では実習費をふくめ10万円以内で資格を得ることができですが、ある大学では60万円もかかると聞いています。学芸員の資格が取れたからといって、必ず学芸員になれるというものではありません。教員資格と同じもので、学芸員になるには、資格がないとダメなのです。

授業だけでなく、実習を通して博物館や美術館の舞台裏や展示の仕方、データ整理、プレゼンテーション、説明、来館者との対応など、学芸員の仕事を体験することは、学芸員の希望者だけでなく、受講するすべての人が自分の可能性や活動の場を広げることに役立つと思います。

1年生から受講すると、順調にいけば3年で学芸員の資格がとれ、履歴書にも書くことができ、自己アピールにつながります。みなさんもぜひ、自己のキャリアアップをふくめ、学芸員の資格をとることをお勧めします。これは、在校生だけでなく、卒業生にも門戸が開かれています。

教員のアクティビティ

本年度の教員の学内外での特徴的な活動状況をピックアップして、主なものを下記に報告します。
各教員の一年間の研究業績と社会的活動の一覧は、春号で一括掲載します。

学会開催と展示会で学科存在感をアピール —福祉と景観をテーマに—

デザイン研究室 (文責: 伊澤 岬)

■ 日本福祉のまちづくり学会 第8回全国大会

「日本福祉のまちづくり学会」の全国大会が、千葉市「千葉教育会館」で2005年8月25日から26日の2日間行われた。当研究室では、江守央助手を中心に研究論文発表や会場設営準備のコーディネータとして、約1年間の準備期間を含めて全面的なバックアップを行ってきた。この学会は近年「バリアフリー」や「ユニバーサルデザイン」に象徴される福祉の分野が社会に浸透しつつあるが、そのきっかけを創出した学会である。特に、医学、理学、工学の分野の違う研究者をはじめ、NPOやボランティアとして地域で活動されている方や自ら障がいをお持ちの当事者の方など福祉に関わる広域的な人々によって構成されている。

本大会には、車椅子の人や目の不自由な人々などさまざまな方の来場が予想され、会場への歩行ルートのバリアの状況などを情報提供することが求められる。そこでバリアチェックを当研究室のゼミ生と特別講義の受講生を中心として行った(交通 Bulletin No.10 掲載)。その成果はバリアマップとしてまとめ大会のポスターの重要な情報とした。

大会当日も当学科の多くの学生にボランティアとして会場案内を担当するなどの協力をもらった。台風の接近にもかかわらず、過去最高の900名近い出席者のなか、132編の研究発表や知事講演、特別講演など幅広い議論が交わされた。

伊澤は、大会実行副委員長を務めるとともに、学会の特別委員会「観光ユニバーサルデザイン」の分野で論文発表、セミナーを主宰した。

「すべての人の安心・自由・幸福をめざして」をテーマとした全国大会は成功に終わったが、「福祉のまちづくり」の課題はまだまだ山積しており、この解決の一助となる活動を研究室では継続したいと考えている。

■ 第3回卒業設計・修士設計+企画展 (景観デザイン教育展)

2005年5月5日から7日までの3日間、船橋日大前駅ギャラリーにて第3回となる平成16年度の卒業設計・修士設計展と、「景観デザイン教育」をメインテーマとした企画展を開催した。企画展では、社会交通工学科において10数年試行してきた「景観デザイン教育」の成果として、製図、景観設計、構造デザインの各授業から学生の優秀保存作品と、特に製図では授業で使用する演習課題をすべて展示した。当学科の「景観デザイン教育」は、河合塾編著の「生き残る大学ランキング」の中でも高い評価を得ている。さらに2005年12月に駿河台キャンパスで開催される「土木学会景観・デザイン研究発表会」において、全国の土木系デザイン教育展にもそのまま出展する予定である。社会的にも、また学会においても大いに注目されている教育プログラムといえる。

期間中は専門家や他大学の学生、高校生など昨年を上回る約200人の来場者があった。また本年度はステッドラー日本株、レモン画翠、アクアオーエーの協賛を頂いた。

温室効果ガスの削減に向けた取り組み

福田 敦

みなさんご存知の通り京都議定書が2005年2月に発効し、日本も2008～2012年の約束期間に1990年当時より温室効果ガスの排出総量を6%削減しなければならない状況です。運輸・交通分野の場合は、交通の発展も考慮して17%の増加が認められていますが、2003年の時点で20%以上の増加となっていますので、これを達成することは大変難しい状況です。そこで、排出量の削減が義務づけられていない開発途上国で温室効果ガスの排出量を削減する事業を行うことで、それによる削減量を日本の排出枠の割り増し分として獲得するクリーン開発メカニズム(CDM)の活用に徐々にですが関心が集まっています。

国土交通省が過去3年に渡り運輸分野でのCDMに関する調査を行っており、私もお手伝いを行ってきました。この調査では、タイのバンコクを対象にパームオイルから生成するバイオ燃料を軽油に20%混合し、バス公社が運行するバス約5000両に供給する事業のフィージビリティを検討してきました。調査の始めの段階では、実走行モ-

ドを作成したり、124台の車両をシャーシダイナモ試験にかけて車種別速度別の排出原単位を作成したりするなど大変苦労しました。また、これらの基礎的なデータを活用して、バイオディーゼル燃料を使ったCDM事業を対象とする新方法論を作成し、この10月には「気候変動に関する国際連合枠組条約(FUCCC)」の下に設置されているCDM理事会に提出することができました。その詳しい内容は、教育方法論「NM0142」として下記URLに掲載されています。

<http://cdm.unfccc.int/methodologies/PAMethodologies/publicview.html>

現在は、審査を待っている状況ですが、これに並行して、事業計画書の作成と実際にパームオイルからバイオ燃料を精製する事業者やこの事業に対して投資をする企業を探するなど事業化に向けた支援も行っています。運輸分野でのCDM事業はいまだ一つも新方法論が認定されていない状況で、当然具体的な事業も始まっていません。運輸分野は温室効果ガスの主要な排出源ですので、この分野で事業が実施されるよう今後も努力していきたいと考えています。



(左) 写真⑫ パーム(油椰子)の实
(右) 写真⑬ シャーシダイナモ試験の様子

ソウル市交通体系改革プロジェクト

安井一彦

2005年9月1日から6日まで、ソウル市交通体系改革プロジェクトの視察、および関連研究打ち合わせのため、ソウル市を訪問しました。「交通体系改革事業」は、ソウル市がソウル市政開発研究院(SDI)に対してプロジェクトの指示書を出し、それに基づいて作成された研究報告書にしたがって計画、実行されたもので、運用後1年が経過しています。現在では、SEOUL TOPIS (Seoul Transport Operation and Information Service) という名称で運用が行われています。

具体的な内容は、以下の通りです。

(1) 路線体系改編

路線体系の改編は、錯綜した今のバス路線体系を一旦白

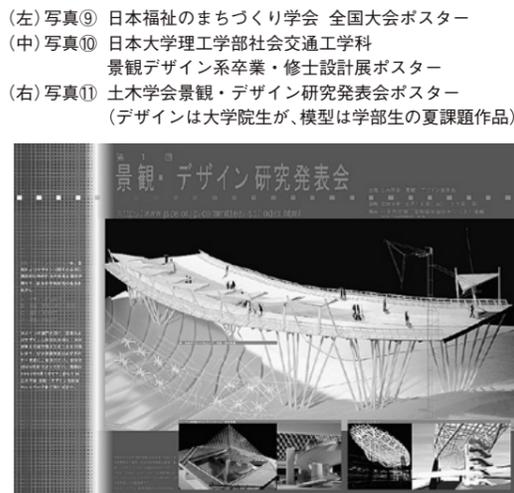
紙にし、路線間の役割分担の強化を図り、利便性向上(バス表定速度・乗客通行時間)と運営能率の向上を図る。

(2) 運営体系改編

ソウル市ではバスに準公営概念を導入し、市が需要を考慮して路線の決定および変更を行い、配車間隔・配車時間・停留所場所などを決定し、かつ運行秩序・バスサービス水準・契約履行の評価も行う。さらに、運営権には3年という期間を定め、事業者は3年単位で延長・退出が可能である。バス会社は18の幹線軸別に200～250台規模の幹線バス会社を運営し、従来の法人とは異なり、コンソーシアム参加方式による別途法人を形成する。

(3) バス運行管理指令室

ITS技術を駆使し、運転手に対しては前後車両間隔情報・前方の交通情報・事故情報などを、バス事業者に対してはバス運行間隔の調整の指示や運行管理に必要な各種情



(左) 写真⑨ 日本福祉のまちづくり学会 全国大会ポスター

(中) 写真⑩ 日本大学理工学部社会交通工学科
景観デザイン系卒業・修士設計展ポスター

(右) 写真⑪ 土木学会景観・デザイン研究発表会ポスター
(デザインは大学院生が、模型は学部生の夏課題作品)

報を提供する。さらに、司令室で得られた情報は、利用者に対してバスの到着予定時間・路線および乗換情報を提供する。またITVカメラを用いた違法駐車摘発を1年間で3万台以上実施した。

(4) 中央バス専用車線制

第一段階として、千戸路を延長する形で夏亭路・千戸路の新設洞交差点～踏十里交差点区間の3.1kmに拡大設置しており、さらに2004年以内に6路線73.5km、2005年以降に5路線84kmへと展開された。

(5) 公営車庫

車庫をインフラ施設とみなして公営車庫を整備することで、業者の経営改善を間接的に支援した。

(6) 交通カードシステム構築

ソウルの交通カードは、すでに非接触式を採用しており、また都市鉄道・バス共通であることから、さらに付加サービスの提供、カード発給費節減および手数料の引き下げが可能な精算システムの構築、新しい運賃体系に対応可能なシステムの導入などが実施された。



写真14 導入前の渋滞状況

(7) 公共交通料金体系改編

バス、地下鉄共通運賃体系とし、距離制を導入し、カードを利用した場合には、乗換による費用は発生しない。

導入後、バスの運行速度の向上や定時制の確保が図られたため、50%を超える利用者のバスへの不満意識が、10%台まで低下し、その結果、一日あたりの公共機関（地下鉄含む）の利用者は前年比で11%の増加を示した。また、バスが関連する交通事故は前年比で26%減少したと報告されている。

第一ステージが終了し、所定の成果を達成できたため、現在は第二ステージ（さまざまなバス走行支援、地下鉄との融合）の開発が開始されています。SDIの李光勲博士は当学科博士課程修了者で、今回の訪問ではバス優先信号制御について意見交換をしてきました。数年前、日本のVICSが運用開始され、世界中の注目を集めました。道路交通情報も包括するSEOUL TOPISの開発スピードの速さに驚くばかりです。北京オリンピックを控え、北京にも同システムが導入される予定であると聞きました。



写真15 導入後のバスの運行状況

学生のアクティビティ

デザインの他流試合で高い評価

デザイン研究室

■ 2004年度「景観開花」設計競技

課題：「新時代の橋梁デザイン」

主催：(社)土木学会東北支部、
(社)土木学会景観・デザイン委員会

2005年1月31日 土川泰明 二次審査通過

■ 写真コンテスト

課題：「ルーフスケープ(屋根景観)コンテスト」

主催：(NPO)日本都市計画家協会

2005年5月31日 土川泰明 佳作

■ ワークショップ

課題：「蘇我臨海部におけるサステナブル・ハウジングの“かたち”とは～千葉県内建築系大学学生による住宅地開発計画のための設計提案～」

主催：JFEスチール(株)

2005年9月26日 デザイン研究室(則本弘明・土川泰明)

蘇我臨海防災都市構想 佳作

参加大学：東京理科大学 初見研究室

千葉大学 中山/宇野/安藤/都市計画研究室

東京電機大学 山本/郷田研究室

石造物に探る鞆の歴史

都市環境計画研究室

都市環境計画研究室(伊東研究室)では、1999(平成11)年より毎年ゼミ合宿を兼ねて、広島県福山市の鞆の浦で研究調査を行っている。

鞆の浦は、まだ車も鉄道もなく、舟による輸送交通が主流であった中世の時代から、航路の要所として発展した港町である。ここには当時からの歴史を今に伝える港湾施設の数々や町並みが今なお残され、世界的にも学術的にもきわめて貴重な歴史港湾都市として近年注目されている。

本年度も8月3日から11日までの9日間、大学院生、4年生、3年生の総勢18名が参加して、小鳥神社の石造物に焦点を当て、鞆町の発展を明らかにするための調査を行った。研究の詳細については、今後、学会などで発表していく予定である。



写真16 小鳥神社での調査活動が紹介された(2005年8月16日「中国新聞」)

船橋市環境フェアへの参加

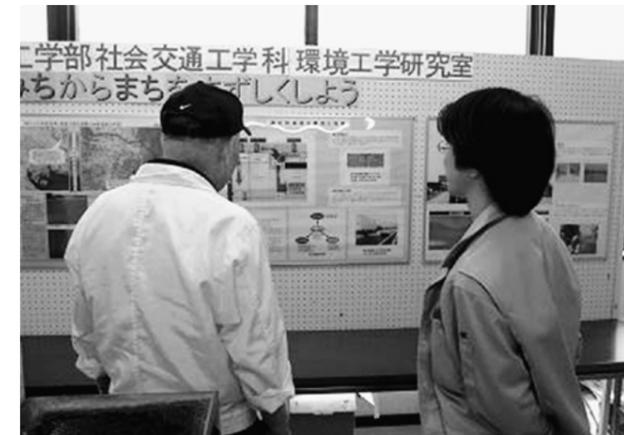
環境工学研究室

環境工学研究室(岩井研究室)では、毎年ゼミナールの一環として船橋市主催の環境フェアにおいて、主に大学および各自の研究テーマに沿って学習した環境についてのパネル展示、実験を行っています。

船橋市では、市環境基本条例第7条に6月5日からの一週間を環境週間と定め、この施策の一環として「船橋市環境フェア」を実施しています。本年度は、市民・企業・環

境団体・行政などで実行委員会を設置し、船橋中央公民館を会場に開催しました。会場では、83団体によるパネル展示、実験コーナー、模擬店、エコ製品の展示など多彩な催しを行い、約3,500名が来場しました。

本年度環境工学研究室では、「みずからまちをすずしくしよう」をテーマに、簡単な気化熱の実験、透水性舗装の模型展示および実演、テーマに関するパネル展示を行いました。なかでも、透水性舗装の模型展示・実演は実際に来場していただいた人にとっても好評で、多くの人に透水性舗装について体験してもらうことができました。



(左)写真17 パネル展示の光景
(右)写真18 環境フェアポスター

日本橋学生工房へ参加

石坂哲宏(交通システム研究室、D2)

東京・日本橋地区にかつてのにぎわいを取り戻すため、まだ枠にとらわれていない学生の自由な発想をまちづくり

に積極的に生かしていこうと、日本橋学生工房と称した地域振興活動が行われている。これは日本橋都市再生検討委員会(委員長:政策研究大学院大学 森地茂教授)の「学生の意見も取り入れていくべき」との提言を受け、土木・建築工学を専攻する学生が集まり2002年6月に設立され

た。第4期にあたる本年度は東京周辺の6大学から計10名の学生が選ばれ、私も同研究室の室井寿明君(D1)とともにその中で活動を行っている。

日本橋地区に一度も訪れたことのない学生がほとんどであったので、私たちの活動は地域の実情を知り、その地域で住んでいる人、働いている人がどのようにまちづくりを考え、何を望んでいるかを知ることから始まった。それは、縁日などの地域のイベントに積極的に参加することで、顔を覚えてもらい、直接話し合える関係を構築することで可能となった。そこで得られた地域の実情を鑑みて、学生のもつアイデアと工学的専門性を加えて、学生工房のまちづくり案として、地域の方に提案し、それに対して、議論を行っている。

まだ、私どもの今期の活動は始まったばかりであるが、地域の方と議論しながらまちづくりを進めていけるという

貴重なチャンスを最大限生かして、自分自身のまちづくりの経験や知識を深めていきたいと考えている。



写真19 かつては日本の中心として栄えた日本橋だが…

駿博奨励賞受賞

石坂哲宏 (交通システム研究室、D2)

平成17年7月20日に開催された駿博会理事会・総会で、平成16年度駿博奨励賞を、小嶋勝衛駿博会会長から頂きました(写真20)。この賞は日本大学大学院理工学研究科の博士後期課程に籍をおく学生の中から優秀な学生4名に、研究活動を奨励するために贈られるものだそうで、本年度は私のほかに、建築学、海洋建築工学、精密機械工学を専攻する学生が受賞しました。

駿博会は、日本大学理工学部で学位を取得された方々の学際的な相互協力、交流・親睦の場として1982年に設立された会で、このような会から奨励賞を頂いたことは、私にとっては名誉なことであり、大変嬉しく思うと同時に、自分自身も学位を取得して、この会の会員になれる

よう、これからも研鑽を積み重ねなければいけないと、思いを新たにしました。



写真20 小嶋勝衛駿博会会長から駿博奨励賞を頂く

ISSOTへの参加

タネート・サティエンナム (交通システム研究室、D2)
大島良輔 (交通システム研究室、M1)

International Student Seminar On Transportation Research is abbreviated as ISSOT. Sponsored by IATSS, ISSOT is an annual symposium on transportation that provides opportunity for students and young researchers to exchange views and opinions on the present and future states of transportation in mobile science in an international and interdisciplinary setting. Aiming to foster academic and professional linkages among its participants, it typically consists of the technical tour (写真21), welcome party and

symposium. ISSOT 2005 organizing committee members, including graduate school students from various universities, are responsible for planning, preparing and organizing all symposium activities, including technical tour, welcome party and presentation session programs, etc. ISSOT 2005 was held from November 29th to December 1st 2005 in Chiba Makuhari, Japan. Theme of ISSOT 2005 was the "Ticket to Tomorrow's Cities" — 2 steps to Sustainable Transport — 24 presenters which came from various countries presented their own researches, and totally 60 participants attended this symposium (写真22). They have exchanged a lot of academic knowledge each other.



写真21 テクニカルツアーで千葉県警を訪問



写真22 参加者全員での記念写真

東京港のあり方を考える懇談会・ 学生委員活動への参加

大島良輔 (交通システム研究室、M1)

東京港のあり方を考える懇談会・学生委員活動は、都民の生活を支える東京港をより一層発展させるため、日頃考えている東京港の問題点や今後東京港が目指すべき姿について、既成概念にとらわれることのない学生など若い世代からの意見を聞き、広く議論を行うために設置されたものです。私を含め4大学より選任された学生4名と、東京港港湾審議委員により構成されております。これまで、10年に一度(次回は2006年度)改訂される東京港第七次改訂港湾計画準備書の内容を題材に議論を行いました。懇談会の前には、港湾審議委員の方々から東京港の歴史、現在の東京港が抱える問題点、さらに第七次改訂港湾計画の中で描いている東京港の将来像についての説明を受け、巡視船による現地視察・コンテナターミナル施設の見学などを

行うなど、私たち学生委員が港湾に対する知識を深めるための機会を設けていただきました。

懇談会では、施設見学などで得られた知見を基に、東京港第七次改訂港湾計画準備書の内容について各自の視点から意見書を作成し、メンバーによる議論を行いました。議論を経て集約された意見は、12月開催の東京都港湾審議会、諮問・答申内で、パブリックコメントのひとつとして提出されます。

このような学生委員を設けたのは今回が初めてで、前例がないため、初めは東京港港湾審議委員の方々も我々も手探りの状態でしたが、回数を重ねるごとに議論が深まり、時には勢い余って意見がぶつかることもありましたが、他大学の専攻が異なる学生と、首都圏4000万人の生活と産業を支える東京港の今後のあり方をしめた重要な計画について、議論を行う機会を得られたことは、非常に有意義な体験でした。

東京都狛江市・まちづくり市民会議への参加

交通環境研究室

狛江市のまちづくり市民会議は、市のまちづくり条例に基づいて設立された市民提案型事業を推進する組織です。この会議には、学科卒業生の岡部順氏(1996年卒)が参加されており、『狛江市の交通問題を解決する』ことを目的に交通改善計画を提案しようとしています。しかし、提案を行うには、交通実態や周辺地域への影響、今後の都市計画道路整備に併せた全体計画との整合性の確保など、より具体的・専門的な検討が必要であり、市民会議から「社会交通工学科の学生の視点とパワーを生かして、市民の取り組みにぜひ力を貸していただきたい」という要請を受けました。

研究室の学生と相談したところ、「市民と一体となって

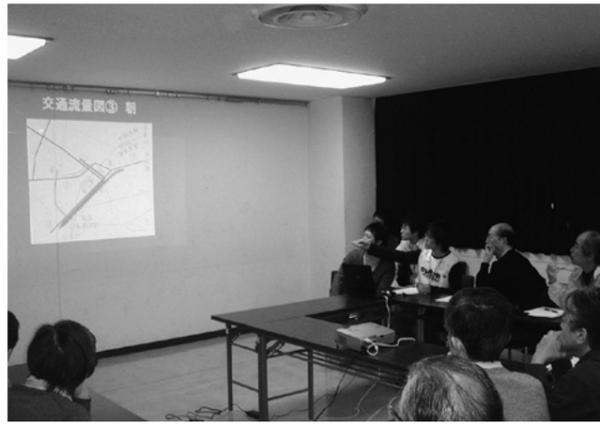
計画ができる絶好の機会であり、ぜひ参加してよりよい計画を提案していきたい」ということになり、2005年8月に市内の交通実態調査を行いました。そして、その調査結果をとりまとめ12月3日(土)11時に開催された市民会議に、学部3年生5名が参加し、学生自らがプロジェクターを用いて、交通実態の現状と課題を報告いたしました。

会議には、市議会議員をはじめ地元設計会社、公務員やその他有志の方々も参加されており、発表20分、質疑応答40分の中身の濃い議論がなされ、

- ①自分たちが経験して感じていた交通の流れが定量的によくまとめられている。
- ②新しい道路ができることにより、交通の流れがどの程度変わるのだろうか。
- ③自分たちの市にこんなに通過交通が流れていたのか。など、たくさんの意見や質問が述べられました。発表した

学生は、今回行った調査（車のプレートナンバーを読み取る調査）で得られた単純なデータから、地域周辺の道路を車両がどのように走行しているかを解析する方法を学び、その解析結果を交通の専門技術者の一員（見習い）として、問題点・課題を提示し、大学での勉強が社会に活かされ、さらに、市民の方々から、解析内容・発表の仕方などについて絶賛され、勉強するモチベーションがとても高くなったようです。

今回は、平日の車の流れを中心に報告しましたが、次回、3月には、休日の様子も取りまとめ、市民会議の拡大会議として、狛江市の行政側担当者や関係機関の方々にもご参加いただき、今回参加できなかった学生たちも含めて学生にまた発表してもらおう予定です。



写真② 狛江市まちづくり市民会議
(写真中央：説明する学部3年生の井上雅喜君・地引裕貴君)

千葉県市原市南総中学校への

『バリアフリー出前講座』

交通環境研究室

社会交通工学科では、高校生を対象とした「車椅子の交通バリアフリー体験」をオープンキャンパスの一貫として実施しています。バリアフリー体験講習は、一般的には視野角を狭めた高齢者疑似体験や、身体に装具を取り付けるなどの妊産婦や障がい者の疑似体験が行われています。本学科で行っている交通バリアフリー体験は、特に、車椅子を利用される障がい者の方々にとって、道路を建設する際の基準となっている道路構造令に基づいて整備された場合と、整備されなかった場合では、どのような不都合やバリアが生じているのかを体感してもらうために、道路の段差や縦断勾配・横断勾配などを任意に設定した模擬コースを作成し、基準に適合あるいは不適合の場合の車椅子利用者への影響を実際に車椅子に乗って体験してもらうものです。

オープンキャンパス時に体験した高校生からも、車椅子にとって何が障がいとなり、どのような改善を具体的に進めなければならないかということを考える大変良い機会になったとの多くの感想を得ています。このように、障がい



写真④ 中学生の車椅子体験
(車椅子をサポートする学部3年生の黒川宣君と4年生の樋口恵一君)

の問題は、実体験しないとなかなか理解できない、わからないから対応できないなど、早期の段階からの教育や経験が必須となるものと考えます。

今回は、市原市南総中学校の林忠雄校長先生の体験学習の必要性に関するご理解を得て、市原市交通バリアフリーワーキング（藤井ならびに山岸晴典君（学部4年生）が参加）の主催、市原市役所まちづくり課協力のもと実施しました。

出前講座は、平成17年12月13日（火）13時より、研究室の学部4年生2名、学部3年生5名が参加し、2年生5クラス198名に対して行いました。

講座の内容は、生徒を2グループに分け、

①交通バリアフリーのミニ講義：「バリアって？そして私たちにもできること！」

②体験コースを用いた車椅子の体験講座：10人程度体験乗車（写真④）

を交互に受講してもらうようにいたしました。

交通バリアフリーのミニ講義では、生徒のバリアフリーに対する意識として、極めて身近な問題として感じ、一緒に考え、やってみようという様子が窺えました。また、実際に車椅子に乗ってもらい、コースを体験した生徒からは、「車椅子の人は、ちょっとの段差や傾きで大変な思いをしているんだ」とか、「皆で安全で通りやすい道をつくらなければならない」、「僕たちも困っている時には積極的に手を貸します」などの声があり、皆で車椅子のことを考えられる良い機会となりました。今後も、このような取り組みを、積極的に展開していきたいと考えています。

卒業生からのメッセージ

学科の卒業生はすでに5,000名を超えています。

大学の諸改革が進む中、そのひとつとして、同窓会「わだちの会」、校友会、学科教室はそれぞれの組織が相互協力体制を強め、連携を深める努力をしています。

本号では、各方面でご活躍の卒業生有志の方々から、学科や在学生へのメッセージとして自由なご意見などをご寄稿していただきました。

「社会人20年を越えて思ったこと」

山田信雄（20期卒）

㈱テクニカルエイト 技術営業部

昭和59年3月卒業の20期生は交通土木工学科の初代であり、また土質研究室での卒研は巻内勝彦先生の第1期生でもありました。応用力学第二研究室（通称：力二研）の宮森建樹先生が海外に出張されていたため、土質研究室（現地盤工学研究室）と合併され大所帯の中で、私は三井建設の研究所で卒業研究をさせていただきました。

バブル前の厳しい就職状況の中、茨城県の建設会社に就職し、昭和60年開催のつくば科学万博の道路工事が社会人デビューとなりました。その後、コンピュータープログラマーを経て、平成2年に道路設計を主体とした会社を共同で設立し、現在に至っております。現場監督・コンピューター・設計コンサルと業務的に異なるものでしたが、その時代にあった仕事ができたと感じます。現在の仕事は元請からの道路設計と、システムを絡めた道路管理用データベース構築や運用検討・交通計画と道路のハード・ソフト両面の業務を行っております。設立10年を過ぎて、微々たるものが元請業務もできるようになり、東京都や区役所への営業や、ある電子納品などの代行業務をコンサル・工事業者へ売り込みに出向いております。

40歳も越えますと仕事をこなすとともに、奥さんや可愛いのか憎たらしいのか2人の子供もいます。私の住んでいる千葉県四街道市は東京に1時間余りですが、かなり田舎の色を残した自然が残る場所です。自分の子供の頃と比べ、お父さんの子供の学校への参加が盛んで「おやじの会」なるものがあり、学校のイベントで焼きそばを作ったり、花を植えたりと異業種のお父さんたちとお話できる機会が数多くあり、さまざまな情報が得られるので大いに勉強になります。

20期生ともなると、社会人20年を越えた、自分では到

底思えませんがベテランと呼ばれるような域に達しているようです。また20歳も離れた大先輩もいらっしゃいますし、同じように41期という社会人デビューしたばかりの後輩もいる大所帯となっています。うれしいことに営業活動をしていますと、建設関連・設計コンサル・発注者と各業種で活躍されている先輩・後輩が大勢います。

在学生のみなさん、まだまだ厳しいご時勢ですがこれからまだまだ長い人生です。大学を卒業して、行き着くところが厳しい社会生活だけと思わないでください。私を除く偉大なる先輩方が大勢いて、何かヒントを与えてもらえるかもしれません。また仕事以外の人との交流や地域活動への参加も何か役立つと思います。大学生活での専門分野を学ぶこと、友人と遊ぶこと、スポーツや趣味を楽しむこと、その他自分の周りにある厳しい場面や楽しいことなど大いに接してみてください。

視野の狭い偏った考え方をせず、何でも吸収できる柔らかい頭をもった社会人になってもらいたいと思います。

「誇りをもって！」

渡辺貞之（20期卒）

㈱東光コンサルタンツ

はじめに

私は21年前の1984年に、学科名が「交通土木工学科」に変わった最初の代として卒業しました。コンサルタントに入社して橋梁設計を専門として仕事をしています。

ここでは、在校生諸君の生きるヒントになればと思い、失敗談を交えてメッセージを送りたいと思います。

設計ミスを犯しました

最初から失敗した話ですが、私は忘れることができない設計ミスをしたことがあります。ある橋の設計を引き継いだ時のことです。単純に設計震度を間違い、それに気が

ついたのは納品1週間前でした。上司と発注者に謝り、設計計算・図面・数量を修正し、ほぼ1ヵ月間、終電と泊まりを繰り返し、やっと納めました。

自分のミスですから直すのは当たり前ですが、就職して初めて死ぬほどつらかった思い出です。しかし、その代償として、設計に対する技術力はレベルアップしたと感じます。間違っただけで技術が身に付くのかもしれません。だからミスを犯せとは言いませんが、ミスを恐れず何にでも挑戦することは大切です。

人生の目標設計

私は20代の後半に、自分の人生の設計を10年スパンで設計しました。30代で技術士を取ろう。40代で博士を取ろう。50代で…というふうに。現在、30代の目標は達成しましたので、次の目標に向かって構想を練っていますが、平坦ではありませんね。でも、目標を掲げておくと、おのずとそれに近づけるものだと思います。ぜひ、みなさんも人生の目標を立ててみてはいかがでしょうか。

チャンスの発見、チャレンジへの勇気

目標を掲げて、いつも何かあしよう、こうしたい、と欲求をもっていると、何気ないことの中にヒントがあり、チャンスを見つけることができます。

次にそれを見つけた時、一歩踏み出す勇気が必要です。どんどん自分から手をあげて、チャレンジすることを勧めます。

卒業生から見た社会交通工学科は誇れます

私は構造工学系の研究室を卒業しましたが、OBとして現在の学科を眺めてみると、研究、教育内容が社会的に評価されていると感じられますので、非常に誇らしく思います。これも学科創立以来、日々たゆまぬ努力と情熱を惜しまず示してくださる先生方、そして社会で活躍する多くの卒業生への評価の結果だと思います。

誇りをもって！

社会交通工学科の在校生諸君へ、どうか夢をもって、目標を掲げて、勉強に研究に励んでください。そして我が学科に誇りをもって社会人となられることを願っています。

「構造設計とコミュニケーション」

大村武馬 (29期卒)
㈱横河技術情報

私は現在、㈱横河技術情報でシステム建築の生産設計に携わっています。システム建築とはその名の通り、梁や柱、外装などさまざまな部品を系統的に組み合わせる製作する建築手法で、一般に事務所や工場などに採用されます。

一般の建築手法と比べて簡素な分、工期を短縮できるというメリットがあり、ここ数年で増大している建築手法です。

橋梁やシステム建築の設計は、基本設計・生産（詳細）設計という2つの段階によって行われます。基本設計では、まったくゼロの段階から設計条件と仕様を決めて構造計算を行い、設計製図を行います。一方、生産設計では、基本設計された構造をどのように工場や現場で製作・施工するかということに主眼を置いて再度、設計製図が行われます。この時、基本設計の図面が本当に構造として成り立つのかというチェック機能も果たしているのです。そのため、現場や工場との調整が必要になる場合もあります。設計は図面だけではなく、コミュニケーションも重要なのです。

数年前、生産拠点としてフィリピンに子会社を設立し、現地でスタッフを採用して設計製図を行う事業を立ち上げました。私もそのプロジェクトに最初から参加しました。それまで私どもの会社では海外進出の経験がなかったため、当初どのように現地スタッフと接していったらいいのかなど、多くの課題を抱え込みました。最も問題になったのは日本語です。フィリピンの言語は英語とタガログ語ですが、図面に表記されているほとんどの文字は日本語です。したがって、彼らには日本語も勉強してもらわなければなりません。日本語の図面を扱ううえで彼らに少しでも日本語能力を上達してもらいたい。そこで現地スタッフには日本語で接する方針とし、現地で日本語学習クラスも設けました。また、必要ならば現地スタッフを日本で数ヵ月の研修も実施するようなプランを立てて実施しています。

フィリピン人の言語習得能力の高さには驚かされます。2年もすれば、日本からの日本語による指示をほとんど理解できるようになります。とはいえ、やはり日本とはまったく違う環境に生まれ育った人たちなので、すべてが順風満帆というわけではありません。現地スタッフと接して驚いたのは、物事の価値観・考え方の違いです。これは言葉の壁以上のものがあります。日本では常識のことであっても、現地では通用しない。こんなことは多々あります。これをいかにスムーズに行うかということも、今の私の任務となっています。そのうち、現地スタッフが日本語を理解しなければならぬと同時に、我々も彼らを理解しようとする姿勢が足りないのではないかとことに気づきました。彼らは勉強した日本語で懸命に話しかけてきますが、やはり本心から話すには至っていないことに気づいたので、彼らを理解するには、彼らの言葉と気持ちで理解する必要があることに気づき、それ以来英語で接するようになりました。彼らの文化や現地のニュースなどにも目を向けるようになりました。また、わからない英語の言い回しがある場合、躊躇せずに質問もしています。このようにコミュニケーションすることで、彼らとの距離がかなり縮まっ

たことを実感しました。

これからの日本は、日本の中だけでは通用しません。海外の人たちとも接していかなければなりません。いかに相手の気持ちと立場を考えてコミュニケーションをするか。もっとも、このことは海外の人に対してだけでなく、日常の何気ないコミュニケーションにも必要なことです。

「海外業務に就いて思うこと」

関 陽水 (36期卒)
㈱アルメック 第一計画部 研究員

私は平成13年度に大学院を修了後、㈱アルメックに入社して4年目になります。弊社は都市計画・交通計画を専門にしているコンサルタントです。現在は弊社が受注した「ベトナム国ハノイ市総合都市開発調査」の関係でJICA調査団の一員としてハノイに滞在中です。

入社後3年間は国内業務に従事しておりましたが、一度は海外業務をやってみたかったこと、国内では経験することが難しいような大規模調査（2万世帯のパーソントリップ調査など）に携われることなどから、この度ハノイ調査に従事することになりました。現在は外国人（ベトナム人やヨーロッパからきている専門家）に囲まれながら交通需要予測などの作業をしています。学生時代から英語には特に苦手意識があったので当然ながら毎日、悪戦苦闘の日々です。帰国したくなったことも時にはありました。大学・大学院で学んだ交通計画に関連する講義や研究は、今の仕事の礎になっています。欲を言えば、語学（特に英語）も学生時代から真面目に取り組めばよかったとつくづく思います。正直なところ学生時代は、交通計画のコンサルタントになりたいと思っていた一方で、英語は苦手だから海外業務に就くことはないだろうと思っていました。ただある時、国内で頑張るよりも海外で経験を積んだ方が一流の技術者になるためには近道だと思ったのです。野球選手がメジャーリーグへ、サッカー選手がセリエAやプレミアリーグで活躍しているように、最近プロスポーツ選手が海外で経験を積んで世界に通用する活躍をしています。どんな分野でも海外で修行や経験を積んだ人はその後、活躍しているように思えたのです。それからは、会社が終わって家についてから英語を勉強するようになり、2004年の12月に本調査に就く貴重な機会に恵まれて、今の仕事に就いています。若いベトナム人の勤勉な姿や、ヨーロッパや日本から来ている技術者の取り組み方などを目の当たりにすると、彼らから学ぶことは多いです。学生時代から自分が将



写真⑧ オフィスにて



写真⑨ オフタイムの楽しみ

来就きたい分野の勉強に加え、英語の勉強に励むことをお勧めします。

「恩師から与えられた課題、その答えを求めて」

渡邊高章 (38期卒)
㈱UG都市建築 都市カンパニー

今にして思うと、なんとも自意識過剰な学生であったような気がする。都市計画がやりたい、自分ならこんな都市を計画してみせるのに。そんなことを考えていた私の自意識を見事に打ち砕いたのは、福山市鞆の浦地区で行われた調査合宿だった。

当時、鞆の浦における伊東研究室の活動は、土木建造物の遺構調査と景観調査が主で、特に土木遺構調査に関しては、地域住民やマスコミ、学識者から高い注目を浴びていた。ただし、それは単なる学術的価値の高さからというわけではない。というのも、ちょうどその頃、鞆の浦では町の特徴となっている円弧型の湾を埋め立てて、橋を架けるという話が現実味を帯びており（その状況は今も変わって

いないが)、私たちの役割は土木遺産の希少性を実証することで、その保存に向けた活動を支援することだったからだ。

その活動の中で与えられた私への問いは「橋を架けるべきか否か」という非常にシンプルなものだった。

軈の町を愛し永続的に暮らしていきたい、その思いが生んだ相反するテーマ。

「君ならば、どう考える」。伊東孝先生の問いかけに対し、私はきちんと答えることができなかったように思う。現代生活の利便性を享受したい、それは市民の欲求として至極まともなものだ。一方で、生まれ育った街の美しさを後生に伝えていきたいという思い、それは誰もが共感できるだろう。その狭間の中で、生活の不便さを味わったことのない外部者が提案するという、住民からすれば不条理な現実。都市プランナーを目指す者にとって、取り組まなければならないあらゆる課題が、軈にはあった。

それから、もう6年が経った。今、私はある都市計画コンサルタント会社で働いている。昨今、都内ではあらゆる場所で再開発が進んでおり、私の手元にもいくつかの開発案件が届いている。ただ、それに対する地権者や周辺住民の考え方はさまざまだ。住み慣れた我が家を離れたくないと思う人たちもいる。そういった案件を目にする時、なぜか思い浮かぶのは6年前のことなのだ。それは、私がまだ6年前の解答を見つけていないということなのかもしれない。

先週、軈でお世話になっていた方からメールが来た。また、橋を架けるという話が進展し始めているという。伊東研究室の学生たちも、街づくり活動に意欲を燃やしているとのことだ。なかなか時間を取れないが、ぜひ行ってみたいと思った。6年前の答えを探すために。

「後輩に送るメッセージ」

高橋正敏 (39期卒)
国土測建科

私は在学中長期休暇を利用し、13ヵ国の景観を学びつつ一人旅をしてきました。旅の目的としまして、もう一つは外国人の友達をつくることでした。今は、アメリカ、ベルギー、ニュージーランドで土木関係の仕事をしている人とメールをしています。ビジネス英語のレベルまで語学力はありませんが、大変勉強になり刺激的です。

卒業後は就職をせず、ニュージーランドで10ヵ月間語学を学びながら、夜はマオリ族の友達の紹介で仕事をして生活をしてきました。

日本へ帰国し、2日後には雇用形態はアルバイトですが

測量会社に入り、実務経験を積み資格を取りました。まったく現場の仕事を知りませんでしたし、海外へたまに出かけられる小さな会社で、融通のきく会社を選びました。測量は二人ペアで作業するのが基本なので、経験のある先輩と仕事ができたおかげで、今ではゼネコンへ出向し、施工管理を学んでいます。CADや図面の見方など経験を積みなければどうしても独学では難しいことがありますが、やる気次第で同期と差が付く業界でもあり、そんなところにも魅力を感じました。朝早く、夏は暑く、冬は寒く、雨でも現場はやるので大変つらい思いもしましたが、構造物ができてくるとやりがいのある仕事だと初めて実感できました。初めの3ヵ月間は現場での仕事が主でしたが、だんだんと内業も増え、自分の判断で行う作業が出てきます。プレッシャーを感じることも多々ありますが、焦らず落ち着きが重要であると、この2年間で実感しました。1、2ミリの世界で仕事をしているので、作業員の方たちとのコミュニケーションも大切ですし、挨拶などの基本的な社会人としての礼儀を学ぶ場としてもいい環境だと思います。現場では事故はつきものなので、毎日緊張感をもって仕事をしなければなりませんし、事故が起きた際にも責任のなすりあいをするのではなく、どのような対策を今後しなければならぬのか、職員だけでなく作業員も納得したうえで作業再開となるので、一人一人の行動は責任重大です。

今後は今の現場が終わり次第、2年間語学を学び、海外事業部を目指しています。スローライフには初め抵抗があり、就職活動を学生時代にしていましたが、まわりに流されず自分のやりたいことをやり通して目標をしっかりもてたため、後悔をせずにここまでこられました。みなさんもまず目標をもち、中途半端で終わらすのではなく、最後までやり遂げる心意気で頑張ってください。

「やってみないとわからない」

福田将志 (39期卒)
㈱日比谷アメニス 都市緑化事業部 工事部

何事もやってみないとわからない。将来どんな仕事をしたいのか。それを十分考慮し、決断したうえで就職するのが一般的だが、就職し実際社会に出てみたら、こんなはずではなかった、思っていたのとは大分違う、というのはよく聞く話であろう。しかし、これはある意味当然だと思う。いきなり自分にとって理想的で一生続けていこうと思うことなど難しいし、やりたい仕事であったとしても理想どおりのことなど、まずないのだから。

将来のやりたいことがはっきりとしている学生は多くはないだろう。そんな中、インターンシップ制度は非常に有意義であり、ぜひ活用して欲しいと思う。そしてアルバイト、ボランティア活動、趣味など、どんなことでもいろいろに挑戦し、いろいろな経験を学生時代にしたい。そういったさまざまな経験から自分のやりたい道、やってみたい道が見つかる可能性は高いと思うし、実際にやってみたらおもしろかったという経験は誰しもあるだろう。仕事探しもそれと基本は変わらない。手取り早いのは、やりたいこと、興味があることがあったら、それに関連する会社説明会にどんどん参加することである。参加するのはもちろんタダだし、ネットや雑誌などでは聞くことのできない現場の生の声、業界の生の声を聞くことができるのは非常に儲けものだ。

私は現在、造園業界という世界で仕事をしているが、造園業という世界をあまりよく知らずに就職したというのが本音になる。社会にはいろいろな業界・仕事があるが、数多くの業界の説明会に参加し、その際に造園業について詳しく話を聞いて、おもしろいかもと思ったのが就職を決めたきっかけだが、皆もそれくらいの気持ちで仕事を探してみてもいいのではないだろうか。

執筆を依頼された時、どんなことを書けばいいのか正直迷った。卒業してまだ2年。社会人としてまだまだ新人の私が在学学生である君たちに何を話せばいいのか。結局、私が仕事を選ぶ時にいろいろ悩んだ経験上から、仕事について考える際のアドバイスを送ろうと思い、このメッセージを書かせてもらった。考えるのもいいが、考えているだけじゃ始まらない。行動すること、やってみることが大事である。最後に在学学生のみなさんが、自分のやりたい仕事に就けることを願う。

「伝蔵少年との出会い」

大沼郁俊 (41期卒)
梅澤忠雄都市計画設計事務所 研究員



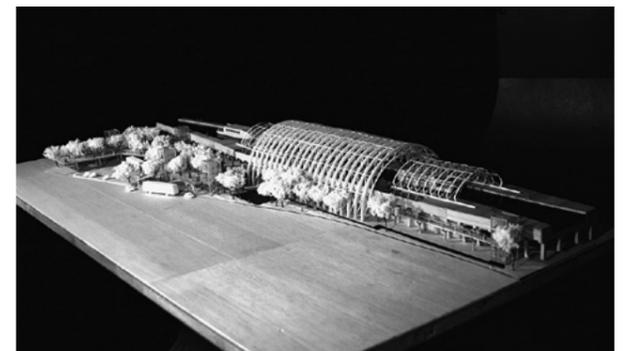
みなさんは『伝蔵のころごし』(著:川村雄介・長崎大学経済学部教授)をご存知でしょうか?簡単に内容を説明しますと、伝蔵少年の「志」遂行のための手段として会社があり、その方法論として「株式とは何か、会社は誰のものか、企業金融」が存在することを伝蔵少年の生涯を通して描いているものであります。欧米社会において幼少期から学問分野として正しく親しまれていることを、我が日本でも取り入れていくべきではないのか、といった著者

の思いも察せられます。理工系出身の私にはとても新鮮であり、そして興味深い分野だと感じました。そして著者の最も伝えたいこと、それは「志」であり、「理想」を掲げることであると社会に出た今、まさに再認識しました。会社とは本来、同じ「志」や「理想」をもった者たちの集合体であり、「利益」は会社を永続させるための手段であります。しかしながら現在、「利益」そのものが目的となっている企業は数多く存在すると思われます。その利益追求型社会の結果はみなさんご存知の通り…という具合であります。

さて、このような社会状況の中、私ができるようにして現事務所と出会い、現在どのような仕事に携わっているのかお話しします。それは、一通の手紙から始まった出会いでした。学生時代、私は恩師である伊澤岬先生の研究室に属し、都市計画、建築計画を学び、数多くの設計競技に参加する日々を過ごしました。その際、伊澤先生より都市計画を中心とした事業を展開している事務所があると伺い、早速社長宛に「お会いして話をさせてください」と筆を執ったところ、事務所へ来てみないかという返事をいただきました。それが、まだ学生であった私の話を熱心に聞いていただき、それに快く返答してくださる魅力的な人であると感じさせられる出会いであり、現在に至るわけであります。

私は今、都市計画において「理想」を掲げることのできるプラン制作業に携わると同時に勉強させていただいています。ここでもやはりどのような都市にしたいのか目標設定の際に、「志」や「意思」の有無が描く都市の魅力を非常に左右すると感じます。常に社会や都市に対して問題意識やそれを解決する手法を模索し続けるという行為が、より良い都市開発をするうえでは必須なことであると心に刻み込んで仕事を続けていきたいと思っています。

今、急速に組織社会からネットワーク社会へ向かいつつある中で、後輩のみなさまには己の強みは何か、自分自身の役割を考え、己をマネジメントすることが重要なことであると伝えたい。最後に自分のやりたいことの「意思」や「志」をもち、常に前進し続ける学生たちを社会は必ず受け入れてくれると確信して日々の勉学に励んでいただきたいと思っています。



写真② 川崎臨海部の都市再生構想(大沼氏修士論文設計作品)

学科を取り巻く近況

学科名称が社会交通工学科となって5年、280単位以上に膨らんでいた学科設置単位を190単位にシェイプアップした新カリキュラムが始まって4年が過ぎました。

入試、就職とも一段と厳しい状況ですが、このような状況に負けないよう教員一丸となって努力しています。

総長選・学部長選

星埜正明 (教室主任)

学部および学科を取り巻く環境が、昨夏激変した。時系列的に記すと、まず、瀬在幸安総長の任期満了(8月31日)に伴う次期総長選挙が6月22日に実施された。その結果、小嶋勝衛理工学部長が1768票を獲得し、佐々木恵彦生物資源科学部長の834票を大きく上回り、当選を決めた。任期は9月1日より3年間である。

8月3日には、小嶋勝衛理工学部長の総長就任に伴う学部長選挙が行われ、79票を獲得した越智光昭教授(機械工学科)が高田邦道教授(社会交通工学科)の73票を上回り、新学部長に決定した。任期は10月1日より3年間である。

9月1日に小嶋新体制が発足し、理事長は総長が兼務することになった。常務理事4名のうち2名は高田邦道教授と岸田宏隆前理工学部事務局長である。さらに、小嶋総長・理事長の“片腕として”高田邦道教授が副理事長に就任した。

学部では、越智新体制が10月1日より始動し、次長をはじめとして、大学院、学務、広報、学生、就職指導の各担当は一新された。

入学試験の最近の状況

天野光一・轟 朝幸 (入試実行委員)

大学全入時代の到来である。少子化と大学志願率の頭打ちで大学・短大の進学希望者数と、大学の募集人員総数が2007年度に同じになるとの試算がある。とはいっても、受験生全員が希望通りの大学に入学できるのではない。一部の人気大学は今後も多くの志願者を集め、激しい競争は続く。その一方で人気のない大学は、志願者数が定員を下回りかねない。つまり、勝ち組と負け組が明確になるのである。

このような状況下において、社会交通工学科も大きな課題に直面している。それは認知度の不足である。交通工学を主とした学科は、我が国唯一である。これは当学科の最大の特色である。しかし、一般の高校生が交通工学という分野を認知していることは稀である。土木工学や建築学、機械工学などは、全国の大学においてそれぞれにPRし、受験雑誌などでも分野紹介の機会を多々見かける。その一

方で、交通工学を紹介するのは当学科しかなく、受験雑誌などで取り上げられる機会もおのずと限られている。

この課題を克服すべく、従来からのパンフレット作成・配布、オープンキャンパスなどでの広報活動に加え、本年度よりいくつかの新たな広報活動を始めた。まず、認知度を上げるための高校訪問の強化である。新たに学科入試アドバイザー(専属職員)を配置し、千葉県や東京都などの高校を個別訪問し、当学科の特色や入試制度などを紹介している。学科教員も付属高校を中心に訪問し、高校の先生や生徒に対して学科をPRしている。在校生からも学生大使を募り、出身高校へ出向いて学科をPRしてもらっている。また、卒業生にはパンフレットや交通プリテンを年一回発送することとした。学科の現在の様子などに関心をもっていただき、卒業生と歩調を合わせて広報活動できればと願っていることである。卒業生とは広報だけにとどまらず、共同研究や就職支援などでの連携も強化し、それによって学科の実力を高めることで、長期的に志願者増に結びつくことを期待している。

本年度も、9月からAO入試がスタートし、年内に指定校高校長推薦、公募制高校長推薦、付属高校等推薦入試が実施される。年明けには、一般入試のA方式、C1方式、C2方式、CA方式の各入試が実施予定である。受験生のみさんの多様な能力を評価するために、さまざまな入試形態を準備しているため、多くの受験生が各自の適性に合った入試方式でチャレンジして欲しいと願っている。

- 社会交通工学科の入試相談や資料請求は、お気軽に次のメールアドレスへご連絡ください。

info@trpt.cst.nihon-u.ac.jp

- 理工学部入試に関する情報は、次のホームページをご参照ください。

http://www.cst.nihon-u.ac.jp/nyushi.html



最近の就職状況について

下辺 悟・藤井敬宏 (4年生クラス担任)

2005年10月15日現在の本学科・専攻の就職(内定)および進学状況は、下記の通りです。

1. 学部の状況(対象者 合計 131名)

- 1) 就職希望者(大学院前期課程進学希望者他を除く)
男子93名 女子14名 計107名
- 2) 就職内定者
男子55名 女子8名 計63名
- 3) 大学院前期課程進学決定者(他大学も含む)
男子18名 女子2名 計20名

2. 大学院の状況(対象者 合計 20名)

- 1) 就職希望者(大学院後期課程進学希望者を除く)
男子17名 女子1名 計18名
- 2) 就職内定者
男子10名 女子0名 計10名
- 3) 大学院後期課程進学決定者(他大学も含む)
男子0名 女子0名 計0名

学部・大学院の就職内定率はそれぞれ59%、56%となっており、まだ内定状況を報告に来ていない学生もいることを踏まえ、前年度並みと思われる。就職内定先の業種別では運輸、物流や各種サービス業関係が中心ですが、建設業や公務員関係が例年より減少しているのが見受けられます。

第25回土木史研究発表会、14号館で開催

伊東 孝

2005年6月18日(土)・19日(日)の両日、第25回土木史研究発表会が日本大学理工学部船橋キャンパスの14号館で開催された。

会場が一昨年の岡山大学と違い、首都圏ということもあってか、一昨年より7篇多い68篇の論文応募があり、社会交通工学科からは3篇が発表された。日本大学の学術研究発表会や土木学会関東支部での発表と違い、「土木史」という専門分野での研究発表会であるため、内容だけでなくQ&Aのやりとりは学生に大きな緊張感とともに、自信をもつたと思われる。初日の夕方には海洋建築工学科の岡田智秀先生の司会のもとに懇親会がもたれ、参加者は発表に関わる質疑内容を発展させ、懇親を深めた。来年の研究発表会は、足利工業大学で開催されることが発表された。会場の14号館の設備と建物の素晴らしさに参加者は感銘していたが、7号館に来られた先生は、14号館とのギャップにも驚かれていた。

船橋キャンパスでの土木史研究発表会は今回が2度目だが、CST MUSEUM(日本大学理工学部科学技術史料セン

ター)では全国の土木史研究者が来訪するのにあわせ、第一回特別展を企画した(別項)。また研究発表会でも特別展にあわせ、「開催校の企画講演」プログラムを組ませていただき、高田邦道先生の「CST MUSEUM 誕生までの経緯」をはじめ、4本の報告があった。

今回、私が土木史研究委員会の委員長をしているため、研究発表会の実行委員長には土木工学科の岸井隆幸先生にお願いし、全体の運営を取り仕切っていただいた。また若い教職員と学生のみなさんには、発表会準備とCST MUSEUMの資料づくり、そして当日の会場の運営にもご協力いただいた。誌面を借りて、お礼申し上げます。

特別展「八十島義之助文庫」と企画コーナー「新谷洋二文庫」

伊東 孝

CST MUSEUM(日本大学理工学部科学技術史料センター)では2005年6月18日に開催された土木史研究発表会にあわせ、特別展「八十島義之助文庫」と企画コーナー「新谷洋二文庫」を開催した。「八十島義之助文庫」は、この4月にCST MUSEUMの資料として新しく加わったものである。東京大学の教授であった八十島先生の資料が、なぜ日本大学にと思われる方もいらっしゃるに違いない。八十島先生は、東京大学で教鞭を執るかたわら、1960年から81年までの間、日本大学理工学部で講義に立ち、大学院生の指導にもあたられた。1998年5月9日死去、享年78歳。残された史資料は約2万点にも及び、和歌子夫人によりCST MUSEUMに寄贈された。

八十島先生は、鉄道を中心とする交通・景観・国土計画などの研究成果を世に問い、今日の交通工学の礎を築くとともに、教育者として多くの人材を育て、政府審議会委員、土木学会会長などさまざまな要職を務められた。その足跡は戦災復興から高度経済成長期を経て、交通インフラの充実と経済大国への道と重なる。国家レベルの広域交通体系のほか、鉄道と道路の結節点である駅と駅前広場の設計や歩行者ネットワークの構成、景観設計など幅広く研究。その成果は東京・千葉をはじめ、多くの都市で交通計画策定のモデルとなった(以上『日刊建設工業新聞』2005.7.19)。今回はこのような膨大な史資料のうち、特に全国総合開発計画にかかわるものと先生の生い立ちを垣間見るノートやスケッチブックなどを中心に展示された。

また企画コーナー「新谷洋二文庫」では、我が国で初めて行われたパーソントリップ調査関係の資料に焦点を当てて展示された。新谷先生は、都市計画・都市交通計画・土木史分野の第一人者であり、時代の先端で活躍されてきた。城郭研究でも大きな実績を残されている。資料の整理がつき次第、「新谷洋二文庫」の特別展も行う予定である。特別展は9月30日に終了。入場者は780人を数えた。

OPEN
CAMPUS
SNAPS



28	29
30	31
32	33

- 写真28 ミニ講義
 29 進路相談
 30 ネット単
 31 透水性舗装体験
 32 模型展示
 33 セグウェイ試乗

編集後記

クリスマスシーズンになると、街のあちこちでイルミネーションが夜の景観を飾り立て、見るひとを楽しませてくれます。

船橋日大前駅ロータリーでも、毎年クリスマスの1～2週間前になると、ひとつのイルミネーションが姿を現します。ロータリー中央に根を下ろす1本の冬枯れたゆりの木に、突如として現れるこの光の装飾は、社会交通工学科の学生が有志で行っている「船橋日大前駅友の会」によって企画されていることをご存知でしたか？

この「船橋日大前駅友の会」は学生有志活動、つまり学生によるボランティア活動であり、イルミネーションに関する知識も予算もほぼゼロという状態から、企画、書類申請、募金活動、そして装飾まで、数多くの課題をこなした上で、さびしげな冬の駅前を華やかに演出してくれているのです。

豪華というには程遠い出来栄かもしれませんが、ひとりの学生のアイデアが周囲の仲間の思いをとりこみ、ひとつの形として大勢の意識に働きかけるものをつくりあげていく。毎年引き継がれるこの活動を通し、何を感じ、何を伝えているのでしょうか？

交通 Bulletin も今回で9号目になりました。毎回過去に学びながら新しいことにも目をむけ、1年の出来事を余すことなく伝えていきたいと思えます。
 (岸上明子・野水雅之)



写真24 ゆりの木に光が灯った (12月17～27日)



写真25 クリスマスプレート (船橋日大前駅友の会 制作)